「イッポンバエのカンカラ」とは

熊澤 良嗣／原 繁雄 調

本稿は追加情報 016「臼台祭あれこれ」の再考である。

‥‥最後に「カンカラ」について私見を含めて少し述べることにする。カンカラは甲高い音がする細い胴の太鼓で、これを叩くには細いバチ（桴・枹）が必要である。

昭和４１年１０月７日に一宮市文化財永久保存用として、観音寺において臼台祭のお囃子が録音された。収録に当たったのは一宮市博物館、演奏したのは当時の笛・太鼓の名人とされた瀬部の古老たちであった。録音の中に「昔木曽川の洪水で堤防危険の際に打ったと伝えられるイッポンバエのカンカラで、臼台祭の始まりと終わりを町中に伝えるもの」というナレーションがある。「イッポンバエ」とは、寄せ木でなく一本の木をくりぬいて作った胴の意味ではないかと思われる。カンカラは２本の枹で叩くので「イッポンバチ」の言い間違いではない‥‥

以上の文は「臼台祭あれこれ」の最後の部分であるが、これを読んだ瀬部・四日市場の原繁雄氏から、「イッポンバエ」というナレーションは「イッポンバチ」の言い間違いか読み間違いではないかとの意見が寄せられた。

原氏は『宝暦治水と薩摩藩士』（伊藤　信、郷土出版社）の中に次の文を見つけた。

‥‥「一本撥（ばち）の太鼓が鳴る。早く家財を片付けよ。ソレ寺の警鐘だ。早く逃げ支度をせよ。」こうして美濃の輪中地帯の人々が、年々歳々洪水に恐れ悸（おのの）いたことは、今の青少年達の夢にも知らぬ所であろう。これは明治２９年９月、私の故郷高須輪中に再度の入水のあった時であった‥‥

（なお、『宝暦治水と薩摩藩士』は杉本苑子が『狐愁の岸』（直木賞受賞）を書くきっかけ

となった歴史ドキュメンタリーの名作で、昭和１８年に出版されている。）

「臼台祭あれこれ」の記述にあたっては、地元の古老達に入念な聞き取りをしたつもりだったが、意見を寄せられた原氏の協力を仰ぎ、もう一度調査することにした。

その結果、昭和４１年の収録を離れたところからそっと見学していたという人が出てきた。その人の話では録音は観音寺の本堂内でなくて野外である境内で行われ、同時ナレーションまでは行われなかったらしい。小型の録音機だったようだから、デンスケと称した手巻き式のオープンリール機だったと思われる。一発勝負の録音になるから、随分と苦労があったことだろう。ナレーションは後から追加したに違いない。

そこで、ナレーションの原稿について博物館に照会したところ、当時まだ博物館は出来ていなかったから、録音には出かけていないはずだという。（一宮市文化財永久保存用録音だから、後からにせよ一宮市にテープは届けられている。）

ではナレーションの原稿は誰が書いたのであろうか。

解説の内容から判断すると、歴史に詳しい文化人だったに違いなく、「イッポンバエ」という言葉を誤用したとは考え難い。ナレーション担当者の読み間違えだったならば、当然修正をしたことであろう。

「イッポンバエ」は「イッポンバチ」の間違いではないようだということが徐々に明らかになってきた。他方、「臼台祭あれこれ」に書いた「バエ」の解釈――木の芯をくり抜いた一木（いちぼく）造りの太鼓――には問題があり、バエという言葉はやはりバチのことを言っているのではないかと思えてきた。

以上について、筆者と原氏が個々に調査を進めた結果は次の通りである。

原氏は一宮市中央図書館に出かけ、この地方の方言に関する書籍を調べ上げて、『丹陽地方の方言』（野村　精、昭和５１年）に以下の記載があるのを発見した。

バエ　　バチ、太鼓を打つ棒

例：カンカラ（太鼓）のバエ２本探して来て呉(く)れんかや。

即ち、「バエ」は少なくとも丹陽地方に存在した方言であることが分かった。

筆者はカンカラ太鼓に糸口があると考え、臼台祭と似た祭りが伝承されている浅井町黒岩の川祭り保存会に照会をおこなった。しかし、黒岩ではカンカラを使用していないとの返事であった。そこで木曽川（南派川）を挟んで同じ譜系の川祭りが復活されている川島町に着目し、「ふるさと史料館」（松倉町(まつくらまち)）を訪ねた。また「川まつり資料館」（渡町(わたりまち)）では保存会長さんに種々お話しをうかがった。いくつもの発見があった。

①渡町の「川まつり」では臼台祭と同様３種類の太鼓が使われており、カンカラ太鼓が含まれていること。②カンカラを叩く道具は「竹バエ」と呼ばれ、臼台祭と同様２本の細長い竹製のバチを用いること。③今でも多くの人がバエといった言い方をすること。（ただし木製の太い打棒はバチと呼んでいる）。④昔、洪水の時にカンカラを叩いたことはよく知られている事実であること。

「バエ」という方言は川島町にも存在し、かつては瀬部にもあったと思われる。

また、「ふるさと史料館」には「一本太鼓」の名前がついた古いカンカラ太鼓が展示されていた。（下の写真）

この太鼓は形状もサイズも、甲高い音がする正しくカンカラ太鼓である。洪水の危険を知らせるには、半鐘を打つのと同じように、片手で、つまり撥一本で叩くから一本太鼓と

名付けたのであろう。それは、ナレーションにあった「イッポンバエのカンカラ」と意味するところは同じだと思われる。

史料館に展示されている一本太鼓。左手は水防団の制帽と思われる。

「木曽川の大水で災害の危険が生じた時、むかしの人が打鳴らしてきた太鼓です」との説明板が添えられている。

なお今回の調査から、堤防危険の際に、寺の半鐘・カンカラ太鼓・ホラ貝などを用いることが各地で行われていたことが判明した。

それはただ人々に避難を呼びかけるためだけでなく、代官所などによる平素からの定めに従って、堤防を守るために村人を召集する目的で行われていたようである。